東洋史研究
第七十八巻　第四號　令和二年三月發行

蘇秦列傳の成立

齋藤　賢

はじめに
第一章　蘇秦傳の構造
第二章　蘇秦說話の展開
第三章　司馬遷と蘇秦傳
結論

はじめに

蘇秦は戰國期の縱横家として最も著名な人物の一人に數えられる。しかしながら、蘇秦の事績を最も體系的に敍述しているはずの『史記』蘇秦列傳には矛盾が散見し、それ故に從來種々の疑問が提起されてきた。夙に北宋の司馬光は秦を函谷關以西に封じた「十五年」という期間が『史記』蘇秦列傳の他の記述とさえ矛盾することを指摘し、蘇轍も同樣の見解

を示した。[1] また、近代フランスの中國學者H. Masperoは、蘇秦に關わる『史記』の年代が甚だしく混亂していること、とりわけ合從が十五年の閒持續した、という記述が『史記』の他の記述と決定的に矛盾することを指摘し、蘇秦に附された全ての行實は純粹な空想であり、蘇秦は小說的人物に過ぎない、と主張した。[2] 次いで、中國での研究に目を轉じよう。近代の學者で、蘇秦につき全面的な檢討を加えた人物としてまず擧げられるのは錢穆である。[3] 錢穆の考察によれば、蘇秦の六國君主へ向けた遊說の辭は當時の情勢に一致せず、後世の僞造であり、その事績として認め得るのは燕に仕えた後、誅殺を恐れて齊に逃亡し、反閒活動により殺害されたことのみとする。すなわち、蘇秦の活動年代については『史記』に從うが、合從はより後の時代のことであるとし、蘇秦の事績ではありえないとするのが錢穆の見解である。また、楊寬はその著『戰國史』において、蘇秦が齊湣王の末年に仕えた實在の人物であるとし、その事績として「合從擯秦」を認めている。[4] その後、一九六〇年代には徐中舒が蘇秦に關する研究を發表している。[5] 徐氏の論は、『史記』に載る蘇秦の辯舌の內容はは時代狀況に適合せず、後代に作られた樣々な說話が蘇秦に附されたという見解は錢穆と同樣だが、實際の蘇秦の活動年代が張儀より下り、蘇秦やその弟とされる蘇代の活動は燕王噲の時代に始まるとの主張に特色がある。また、『史記』が蘇秦の活動年代を遡らせ、その死を紀元前三二〇年頃に置いたために、その時期以後の年代觀をもつ說話のうちで、蘇秦が登場する場合、蘇秦が蘇代に書き換えられている例があることも指摘されている。一方、諸祖耿は徐氏の論に對して逐一反駁を加え、『史記』の記述に基本的に從う姿勢を見せる。[6]

以上の諸研究は單線的な發展をたどったわけではないが、總括すれば、蘇秦を全くの虛構と考える說、蘇秦の活動時期については『史記』の年代觀に從いつつ、個々の事績については史實ではないとする說、『史記』の年代觀を否定し、より下った時期に蘇秦の活動を認める說、そして『史記』の記述を肯定する說などに分類され、定論をみなかった。かかる狀況の轉機となったのは一九七三年における『戰國縱橫家書』の發見である。『戰國縱橫家書』は戰國時代の故事二十七章を記した文獻であるが、その中でも十四章に傳世文獻に見えぬ蘇秦に關わる說話が收錄されていることがとりわけ注目

された。その後一九七六年、馬雍・唐蘭・楊寛らは『戰國縱横家書』に關する研究を發表し、『史記』に描かれた蘇秦の行實は誤りであり、『戰國縱横家書』こそが蘇秦の眞正の史料であると主張した。[7] 三者の主張は細部においては差異が存するが、概ねこれらの研究に卽した見解が現在の學界で主流となっていると言えよう。しかし、出土史料の偏重に異議を唱え、『史記』の記述を重視する研究者もおり、蘇秦が如何なる人物であったかは仍お解決を見ない。[8]

蘇秦に關わる議論が紛糾する原因の一つに、『史記』蘇秦列傳の成立過程や、その原史料となった蘇秦に關する個々の說話の形成に對する理解の不足が擧げられる。かかる問題意識から、以下では第一章で『史記』蘇秦列傳の構造を分析し、第二章で蘇秦列傳の原史料となった個々の說話の展開を跡附け、それらをもとに第三章では『史記』蘇秦列傳の成立について考察する。

なお、本文においては『戰國策』に關しては、初出時に章名を記し、それ以後は國＋卷＋章番號で簡稱する。例えば「秦一2」は姚本『戰國策』秦策一の第2章を指す。

第一章　蘇秦傳の構造

蘇秦傳（以下、『史記』蘇秦列傳のうち、特に蘇秦について記した部分のみを指す場合は「蘇秦傳」と稱する。）の梗概は次の如くである。すなわち、前半部は、雒陽の民である蘇秦が遊說の術を修め、六國の合從を約して武安君に封ぜられ、秦を函谷關以西に十五年閒封じ込める、という榮達の道程を描き、後半部では合從解體後、蘇秦が燕・齊の閒で活動し、暗殺されるまでを記述する。本章では、蘇秦傳を構成する個々の原史料が如何なるものであるかを分析する。

一．蘇秦榮達說話の構成と原史料

蘇秦傳の前半は旣述の如く、六國を合從させて秦を封じ込めるという說話であるが、大枠としては『戰國策』秦策一・

蘇秦始將連横章（秦一2）を原史料として採用していると考えられる。秦策に載るこの説話は、蘇秦が秦惠王のもとへ赴いて連衡策を説く場面から始まり、秦王に拒絶された後、財盡きて歸鄉するが家族に嘲笑され、發奮して勉學に勵み、東のかた趙王に遊説して大いに悅ばれ、武安君に封ぜられて相に任命されるという構成になっている。(9) この説話においては蘇秦の榮達を描寫することに力點があり、これ自體で一つの完結した構成を持っていることは、末尾に記された「嗟乎、貧窮なれば則ち父母も子とせず、富貴なれば則ち親戚も畏懼す。人生世上、勢位富貴、蓋ぞ忽せにすべけんや」という蘇秦の言が該章の内容を要約したものであることからも知られる。(10) ただし、『史記』が採用したのは飽くまでこの史料の大枠であり、細部には些か改變が加えられているということが、『史記』と『戰國策』の構成の比較を通して明らかとなる。すなわち、秦一2では蘇秦が秦に遊説して失敗、家族の嘲笑を受けて發奮し、勉學に勵んだ結果、趙に遊説して成功する、という展開となっているのに對し、蘇秦傳では諸國を遊説して失敗し、家族の嘲笑を受け發奮、勉學したにも關わらず、秦・趙に遊説して失敗し、その後燕において初めて成功する、という展開となっている。つまり、本來であれば遊説の成功に大きな役割を果たしたはずの勉學の意義が『史記』の傳では矮小化されているのである。

『戰國策』秦策：遊説（秦）→失敗→發奮・勉學→遊説の成功（趙）
『史記』蘇秦傳：諸國遊説→失敗→發奮・勉學→**遊説の失敗（秦・趙）**→遊説の成功（燕）

蘇秦傳の説話展開がこのように不自然にならざるを得なかった原因は、元來獨立してそれ自體で完結していた説話である秦一2を大筋として採用しつつ、鬼谷先生への師事や周顯王への遊説、奉陽君との不和などといった、別個に成立した説話をも取り込んだことにある。しかし、説話の展開のみならず、注目すべき差異が蘇秦傳と秦一2には認められる。それは兩説話の中で六國がどのように扱われているか、という點である。秦一2では專ら趙が合從の中心として描かれており、他の諸侯は「山東之國從風而服、使趙大重」と一括して觸れられるだけである。秦・趙以外には僅かに楚王への遊説

が言及されるが、その理由は偏に説話の展開に求められるであろう。つまり、楚王遊説の記述が、蘇秦が故郷洛陽を通過するに際して家族に出迎えられる、という場面の直前に置かれていることからも推察されるように、趙を起點とした場合、諸侯國の中では楚への往路に洛陽を通過するというのが最も自然であるということに過ぎず、楚國自體がこの説話において特別な意味を持っていたと見做すことはできないのである。[11]

他方、蘇秦傳では確かに趙を合從の中心として描いているが、他の五國――韓・魏・齊・楚・燕――にも一定の比重を置いて記述している。このように、蘇秦傳が趙のみならず他の五國にも重點をおいているという印象を與えるのは、六國の君主に向けた長篇の説辭を採錄しているためである。これらの説辭は、細部に異同はあるものの似通った文章が『戰國策』に收められており、蘇秦傳の原史料と見做して大過ないと思われる。[12]

次いで問題となるのは、六國遊説辭が秦一2と同時に、且つ同一の構想のもとに作成されたか否か、であるが、遊説辭と秦一2各々の想定する情勢に齟齬があることから見て、別個に成立したとするのが妥當である。例えば

蘇秦…秦惠王に説きて曰く「大王の國、西に巴蜀漢中の利有り」。（秦一2）[13]

楚王曰く「…秦 巴蜀を舉げ漢中を幷せんとするの心有り」。（『戰國策』楚策一・蘇秦爲趙合從説楚威王章）[14]

の如く、兩者は明らかに矛盾しており、一時に一人の手になったものとは思われない。ただし、兩説話に全く關聯がなかったわけではなく、そのことは

趙王大いに悅び、封じて武安君と爲し、相印を受け、革車百乘、綿繡千純、白璧百雙、黃金萬溢、以って其の後に隨わしむ。（秦一2）[15]

趙王…乃ち蘇秦を封じて武安君と爲し、飾車百乘、黃金千鎰、白璧百雙、錦繡千純、以て諸侯を約せしむ。（『戰國策』趙策二・蘇秦從燕之趙始合從章）[16]

という表現の類似が示している。かかる相違と類似を考慮すれば、秦一2が先行して成立し、それに着想を得て新たに六

國說辭が創られた、という推定が可能であろう。

以上の考察を通して、蘇秦傳の前半部が大きく分けて秦一2及び六國說辭という二つの史料から構成されていることが明らかとなった。この二つを骨子として、鬼谷先生や周顯王・奉陽君などの說話を插入することによって前半部は構成されている。

二　齊燕反間說話

蘇秦傳後半部は合從成立後間もなく、秦に使嗾された齊・魏が趙を攻擊するという情勢から始まる。齊・魏の攻擊を合從への違背として怒った趙王は蘇秦を譴責し、それを恐れた蘇秦は燕へと赴く。しかし、燕文侯の死後、齊が燕の喪に乘じて攻擊を仕掛け、燕の十城を奪う。これに不滿を覺えた燕易王は蘇秦を非難し、愧じた蘇秦は齊から十城を取り戻すことを請い、齊に赴いて十城を奪回する。ところが、燕へと歸還した蘇秦は、讒言を信じた燕王によって受け入れを拒否されたため、自己の潔白を主張し、その結果燕王に許される。その後、燕王の母と私通し、燕王の知るところとなったが、燕王は反って益々蘇秦を重用した。しかし誅を恐れた蘇秦は燕の爲に齊において反間活動を行うことを申し出、許されて齊に赴き、最終的に蘇秦が齊王に寵愛されるのを妬んだ大夫によって殺害される、という敍述になっている。

さて、蘇秦傳の後半部は、內容において『戰國策』燕策一・燕文公時章（燕一4）、同策・人有惡蘇秦於燕王者章（燕一5）に類似し、燕一4が十城恢復、燕一5が齊より歸還した後の自己の潔白を說く說話に該當する。そのうち、燕一4はその冒頭部が蘇秦傳を要約したような記述となっており、また齊桓公と韓獻子の故事が『史記』には見えぬことを除き、若干の字句の異同はあるものの、『史記』の對應箇所とほぼ同文である。[17]

次に燕一5であるが、ここでは「燕王」とのみ言及されるだけであり、說話の年代は不明確である。しかし、この章は燕策一・蘇代謂燕昭王章（燕一14）と表現・內容において類似し、同一の系統に屬する說話であった可能性が高い。また

『戰國縱横家書』第五章は燕一5や燕一14を節略した形式をとるが、冒頭の「謂燕王曰」に續いて直ちに孝・信・廉の譬えが展開される點でより燕一14に似る。[18] というのも、燕一5では「謂燕王曰」の後に、蘇秦が齊を說いて燕の十城を返還させて齊より歸還した、という背景描寫がなされる點で差異が存在するからである。[19] 一方、孝・信・廉の代表として擧げられた人物が燕一14では曾參・孝己・尾生高・鮑焦・史鰌であるのに對し、燕一5および『戰國縱横家書』第五章では曾參（增參）・尾生（犀星）・伯夷（相夷）であるという事實を勘案すれば、燕策と『戰國縱横家書』の三說話が同一の系統に屬すること、及び『戰國縱横家書』が燕一5と燕一14の中間に位置する形態であることが推測できる。この推定に立つならば、燕一14が齊への報復を主題とした燕昭王期の說話であることから、燕一5も元來は燕昭王期の說話であったと判斷することが許されよう。

蘇秦傳後半部は、さらに易王母との私通と齊湣王初期の反間活動についても記しているが、この二說話は『史記』以外に比較できる史料が存在せず、現時點ではそれぞれ燕易王期と齊湣王期の年代の說話とするほかない。

本章では、蘇秦列傳を合從說話と齊燕反間說話という前後半の二部に大別して分析を加えた。そのうち、前半部は『史記』に先行する趙を中心とした合從說話に六國遊說辭を組み入れた六國合從說話を軸とし、さらに鬼谷先生や周顯王・奉陽君等の說話を結合させており、齊燕說話は燕一4・燕一5に類似する說話及び燕王母との私通・齊における反間活動、という四部分から構成されているという結論を得た。

第二章　蘇秦說話の展開

第一章では蘇秦傳が先行する複數の說話を結合して成立したことを示した。次に問題となるのは、先行する個々の說話がどのように發生・展開したかである。現在では、史實としての蘇秦を紀元前二八〇年代前半に主に燕齊間の外交に從事し、紀元前二八四年の齊湣王敗滅以前に車裂に死した人物、とする『史記』の記述と大きく異なる見解が主流となってお

り、それに從って『史記』蘇秦列傳を虛構として退ける傾向にある。しかし、一方の史料を史實と見做し、それを根據として矛盾する史料を一概に否定するのでは、史料を正當に用いたとは言い難い。蘇秦が歷史的に實在した人物であるのか、また存在したとすれば、蘇秦が如何なる生涯を辿ったのか、ということは暫時待考とせねばならない。まず解明すべきは、蘇秦列傳の如き蘇秦像が何故生じたか、である。何となれば、『史記』に至るまでの蘇秦像の變遷を辿り、蘇秦列傳の形成過程を明らかにしてこそ『史記』蘇秦列傳を正しく評價し得、またそれによって初めて、蘇秦に關わる諸問題を適切に論ずることができると考えるからである。

かかる問題意識を背景に、以下では蘇秦說話の生成から『史記』に結實するまでの變遷を檢討する。その際、蘇秦傳の展開には依らず、蘇秦說話自體の歷史的展開に沿って考察していくこととする。なお、後述するように「縱橫家」という言葉はあたかも他と明確に區別される「縱橫家」思想なるものが存在したという印象を與えかねないので、その使用には問題が存するが、本稿では「縱橫長短」の術を學び、主として外交に從事した口舌の徒を指して「縱橫家」と稱することとする。

一．齊に關わる蘇秦說話の展開

蘇秦の傳承は、その最初期においては齊に關聯して展開したと推測される。成書年代が比較的明確な傳世文獻の中、最も早く蘇秦に言及するのは序文に紀元前二三九年の紀年を持つ『呂氏春秋』である。

夫れ王霸を成す者固より人あり、國を亡う者も亦た人あり。桀 羊辛を用い、紂 惡來を用い、宋 駃唐を用い、齊 蘇秦を用い、而して天下其の亡ぶを知る。（『呂氏春秋』知度）[20]

桀紂宋齊という配列から、「齊…天下知其亡」が齊湣王の敗滅を指すことは明白であるが、この記述からは蘇秦を用いたことが齊滅亡の原因であるとする認識が窺える。『呂氏春秋』の成書が齊敗滅から四十五年しか隔たっていないことを考

慮すれば、蘇秦を用いたことが齊を滅亡に導いた、という齊敗滅に關わる傳承が蘇秦説話の中でも最も早期に屬するものと考えて大過ないと思われる。また、戰國末期に成立した『荀子』にも同様の認識を示す記述がある。

内は民を一にせしむるに足らず、外は難を距がしむるに足らず、百姓親しまず、諸侯信ぜず、然り而して巧敏佞説にして善く寵を上に取る、是れ態臣なる者なり。…態臣を用いる者は亡ぶ。態臣用いらるれば則ち必ず死す…故に齊の蘇秦・楚の州侯・秦の張祿、態臣と謂う可き者なり。（『荀子』臣道）[21]

『呂氏春秋』『荀子』ともに蘇秦に對し、國を滅亡に導いた人物として否定的評價を下している。さらに、荀子が齊の稷下に遊んだことから、蘇秦の否定的評價が戰國末の齊地でなされていたことが推測できる。

この齊滅亡説話から、蘇秦傳後半部に記述された齊燕反閒説話の基礎となる傳承が展開したのであろう。齊湣王の敗滅に燕が深く關與していたことを考えれば、燕と蘇秦を結びつけることは自然な發想であった。ただし、指摘すべきは、齊湣王の敗滅に關わる蘇秦説話の元來の年代觀が『史記』と異なることである。これに關し『説苑』君道及び尊賢には、蘇秦の活動を燕昭王期とする説話が收められている。

燕昭王郭隗に問うて曰く「寡人地狹く人寡く、齊人八城を削取し、匈奴樓煩の下に驅馳す。孤の不肖を以て、宗廟を承くるを得るも、社稷を危うくせんことを恐る。之を存つに道あるか」…郭隗曰く「王誠に道を興さんと欲すれば、隗請うらくは天下の士の爲に路を開かん」。是に於て燕王常に郭隗を上坐に置きて南面せしむ。居ること三年、蘇子之を聞きて、周從り燕に歸し、鄒衍之を聞きて、齊從り燕に歸し、樂毅之を聞きて、趙從り燕に歸し、屈景之を聞きて、楚從り燕に歸す。四子畢く至り、果して弱燕を以て强齊を幷す。（『説苑』君道）[22]

燕昭王郭隗を得て、鄒衍樂毅齊趙以り至り、蘇子屈景周楚以り至る。是に於て兵を擧げて齊を攻め、閔王を莒に棲まわす。燕は地を校り衆を計るに、齊と鈞しきに非ざるなり。然るに能く意を信べて此に至る所以の者は、士を得るに由るなり。（『説苑』尊賢）[23]

これは「蘇子」が燕昭王に仕えて齊を滅ぼした、という認識を示している。また『史記』によれば樂毅が燕に赴くのは趙武靈王の死後であり、この說話の想定する年代は紀元前二九五年前後となる。[24] この年代觀が齊滅亡說話のそれと極めて近いことも兩者の密接な關係を示唆する。なお附言しておくと、鄒衍・樂毅・屈景という人名表記から考えるならば、『說苑』が「蘇子」と記すのは、『史記』と齟齬するが故に元來の「蘇秦」という表記を改めたためであろう。[25]

ここまで、齊と燕という蘇秦傳後半の舞臺を見てきたので、蘇秦と趙との關聯が生じた經緯にも觸れておこう。まず、先に引用した『呂氏春秋』や『荀子』から考える限り、戰國末に至っても仍お蘇秦と趙との關係は明確化していない。現時點で、最も早く蘇秦と趙との間に何らかの關聯があることを窺わせる史料は漢初の『戰國縱橫家書』である。『戰國縱橫家書』に記される故事のうち、第一章～第十四章までが蘇秦に關わる說話であるとされており、齊における活動の他に趙での活動が記されている點が注目される。[26] 蘇秦とされる人物は、齊への復讐を期する燕王の爲に、齊趙關係を惡化させることを目的として活動しているが、その中でも、第一章～第三章及び第十一章・第十二章からは、蘇秦と思われる人物が趙に滯在していることが窺われ、蘇秦が既に趙と密接に關わりを持っていたことがわかる。おそらく、齊燕の角逐に趙が關わっていたことから、齊のみならず、趙においても蘇秦が活動したという說話が生じたのであろう。當時趙で活動した奉陽君との敵對關係などという、後に『史記』に採用されることとなった要素も、この時點で生じたと考えられる。ただし、この說話群においては、蘇秦と趙の關係が決して良好なものではなかったことが『戰國策』『戰國縱橫家書』からも確認できる。

二　合從說話の展開

前節では蘇秦が主として齊燕間で活動する說話について述べた。次に問題となるのは、かかる齊燕說話から、如何にして六國合從說話が生じたかである。ここで指摘すべきは、諸國を聯合させるという說話に發展し得る內容が『戰國策』や

『戰國縱横家書』に記述されたような齊・燕・趙説話の時點で既に含まれているということである。『戰國縱横家書』では第七・八・十・十一・十二・十四章に攻秦についての記述がある。[27] 一例を擧げる。

兄（況）や臣能く天下を以て秦を功（攻）め、疾く秦と相い萃（捽）りて解けざらしむるをや。（『戰國縱横家書』第十章）[28]

「臣」と自稱する人物は蘇秦とされており、自ら天下を率いて秦を攻めることに言及していることから、蘇秦の所謂六國合從の原型とも言うべきものをここに認めることができよう。

また『戰國策』にも次のような記載がある。

臣又偏く三晉の吏、奉陽君・孟嘗君・韓呡・周𠭯・周・韓餘爲の徒に事え、從いて之に下る。其の伐秦の疑わしきを恐るるや、又身自ら秦に醜（にく）ましめて之を扮す。天下の秦符を焚かんことを請う者は臣なり。次いで焚符の約を傳えし者は臣なり。次いで五國をして約して秦關を閉ざさしむる者は臣なり。（『戰國策』魏策二「五國伐秦無攻而還」章）[29]

發言者は「臣」と自稱しており、その人物の名は明記されていないが、文中に見える奉陽君、孟嘗君、韓呡、韓餘爲は『戰國縱横家書』でも蘇秦と思われる人物の書簡に同時代の人物として屢々名が擧げられていることから、同様に蘇秦と見做してよいであろう。ここでは諸國に秦との同盟を破棄させ、五國をして秦を關以西に閉じ込めさせた、という事績に言及している。しかし、かかる類似に基づいて、これらの發言の背景にある説話を直ちに後の合從説話と同一視することはできない。何故なら、秦一2に記されたような合從説話は趙を中心とし、且つ齊燕等の諸侯國の重要性が低い、などといった點で異なるからである。趙中心の合從説話は、齊燕説話に含まれる聯合抗秦説話に着想を得つつも、それらとはまた異なる意圖・構想のもとに作り出されたと考えられる。

では、その作り手は一體如何なる人々であったのだろうか。趙を中心とすることから、あるいは長平の戰以降、趙國の士が衰亡の一途を辿る祖國の往昔の强盛を懷古して作り上げた、との推測も可能であろう。張儀列傳の論贊には次のよう

に述べられている。

三晉權變の士多し。夫の從衡彊秦を言う者は大抵皆三晉の人なり。[30]

司馬遷のかかる言からは、三晉の地に縱横家が多く輩出したことがわかる。[31] ただ、秦一2に關して言えば、その成立は漢代以降に下るであろう。そのことは漢代の文章との比較によっても明らかとなる。秦一2では、蘇秦が合從を成立させたことを稱えて

此の時に當り、天下の大、萬民の衆、王侯の威、謀臣の權、皆蘇秦の策に決せんと欲す。斗糧も費やさず、未だ一兵も煩わさず、未だ一士も戰わしめず、未だ一弦も絶たず、未だ一矢も折らずして、諸侯相い親しむこと兄弟に賢る。[32]

と述べられているが、この表現が

孔子曰く「…賜や、爾何如」。對えて曰く「素衣縞冠もて、兩國の間に使いし、尺寸の兵・斗升の糧を持せずして、兩國をして相い親しむこと弟兄の如くせしむるを得ん」。（『韓詩外傳』卷九）[33]

に類似していることは一見して明らかである。[34] また、縱横家の手になったと思われる秦一2に見える表現が、『韓詩外傳』の説話においては儒家の口を借りて發せられている、という事實はより興味深い。ここで想起すべきは、漢代の縱横家が儒家思想に親しんでいたという事實である。その形跡は文獻に徵せられる。例えば、武帝期に活動した主父偃は「學長短縱横之術、晩乃學易・春秋・百家言」とあり、縱横家でありながら儒家の經典をも學んでいたことがわかる。[35] 他方、劉邦に「豎儒」と罵られた酈食其が「六國從横時」のことを說いたことからもわかるように、儒家が縱横家の學を修めることもあり得た。[36] 無論、「縱横家」なる學派が太史公自序の「六家要指」には見えず、『漢書』藝文志の時點で儒家や道家と竝んで初めて「從横家者流」と記されていることから、他の學派と明確に思想的差異のある獨立した一派として認識されるのは漢代も後半であったことが推測され、かかる事實に鑑みれば、前漢初期に他と截然と區別しうる「縱横家」思想があったとするのは適切さを缺く虞がある。しかしながら、少なくとも後世からみて「縱横家」と「儒家」に分類されうる

ような思想が一個人の中に併存することはあり得たことであろう。かかる點を考慮すれば、主父偃傳に見える表現の類似は秦一2の作者についての更なる推測を促す。

蘇秦喟然として歎じて曰く、此れ一人の身、富貴なれば則ち親戚も之を畏懼し、貧賤なれば則ち之を輕易す…是に於て千金を散じ、以て宗族朋友に賜う。(『史記』蘇秦列傳[37])

臣結髪して游學すること四十餘年、身は遂ぐるを得ず、親は以て子と爲さず、昆弟は收めず、賓客は我を棄て、我阨しむこと日久し。且つ丈夫生まれて五鼎もて食せざれば、死して卽ち五鼎もて烹らるるのみ。吾日暮れて途遠し、故に倒行して之を暴施す。…上主父を拜して齊相と爲す。齊に至りて、遍く昆弟賓客を召し、五百金を散じて之に予え、之を數めて曰く始め吾れ貧しき時、昆弟は我を衣食せず、賓客は我を門に内れず。今吾齊に相たるや、諸君我を迎うること或いは千里。吾諸君と絶てり。復た偃の門に入る毋れ」。(『史記』平津侯主父列傳[38])

兩者とも富貴貧窮によって世人の態度が逆轉する、という同様の發想に出ており、榮達を遂げた後、親近者に財を與えるという行動も類似していることから、蘇秦傳の原史料たる秦一2も、やはり漢代の縱横家によって作成されたとしてよいと思われる。確かに、かかる表現が戰國期に既に定型化され、それが漢代まで襲用されたという可能性は排除できないが、『韓詩外傳』の例も考慮すれば、やはり漢代の成立と考えるのが穩當であろう。[39]

次いで檢討すべきは、漢代の縱横家がかかる蘇秦說話を展開せんとした、その背景は如何なるものであったか、ということである。『淮南子』は縱横家の產生した狀況について、一つの見解を示している。

晩世の時、六國諸侯…各々自ら其の境内を治め、其の分地を守り、其の權柄を握り、其の政令を擅ままにす。下に方伯無く、上に天子無く、力征して權を爭い、勝者右と爲る…故に縱横修短焉(こ)に生ず。(『淮南子』要略訓[40])

この記述からは、戰國時代の如き諸侯が相攻伐する混亂した情勢下においてこそ縱横家が最も活躍できる、との認識が看取できる。これは當然ながら漢代における認識に過ぎないが、歷史的實態をある程度反映していると思われる。そのうち

「上に天子無し」は周王の權威の低下を明示したものであると言えよう。一方、對となる「下に方伯無し」とは、戰國前期の文侯・武侯期には最强國であった魏が、惠王期、特に馬陵の大敗以後その勢力を減退させ、霸者としての地位を最終的に喪失し、春秋時代以來の霸者體制が最終的に崩壞したことを意味するものである。[41] また戰國期以降の有力國による斷續的な勢力擴大の結果、戰國中期には緩衝國として機能した小國が前代に比して減少したことは、勢力の拮抗する大國間における紛爭を一層緊迫化させた。この權威・實力において一方が他方を凌駕することのない情勢下では、自國の優位を保持するために自ら積極的に他國と同盟を結び、敵對國を牽制することが不可缺となる。かかる時代狀況に好機を見出したのが後世の所謂縱橫家であった。當時、自國內で恆常的安定的に官僚を育成し再生產する體制が未だ發展しておらず、人材を外部から獲得する必要があったことも縱橫家の躍進を促した要因の一つであろう。何となれば、合從連衡を說く人物は多くの場合「客」と稱される異國人であるからである。また、それ故に彼らは一般の臣と異なる扱いを受けており、このことが縱橫家に要求される「專對」を容易ならしめたとも考えられる。[42]

しかしながら、かかる情勢も長くは續かなかった。前二八四年には東方の雄國であった齊が敗滅し、郢都の陷落が示す如く楚もまた劣勢に立たされ、秦一强の形勢が明らかとなる。その後、長平の戰によってその趨勢が決定的になると、外交はもはや抗秦あるいは親秦に限られ、それ以前のより多樣な同盟關係の構築は既に嘗ての意義を喪失し、縱橫家の活動もそれにつれて必然的に衰退を餘儀なくされたであろう。確かに、縱橫家が楚漢抗爭期を經て漢代に入っても仍お存續していたことは、蒯通の存在からもわかるけれども、漢王朝成立以降、縱橫家は活躍の場を失い、やはり退潮を餘儀なくされた。その窮地を脫するために彼らが爲したことの一つが、縱橫家の辯舌と策謀を强調し、ひいては自らの有用性を主張するような說話を作り出すことであった。そしてその際、說話を假託する對象として選ばれた人物の一人が蘇秦だったと考えられる。

蘇秦が縱橫家たちに選ばれた理由の一つには、漢代縱橫家の多くが齊地において活動していたということが擧げられる。

縱横家として知られる人物には楚漢抗争期の蒯通に始まり鄒陽・主父偃・嚴安などがいるが、彼らが皆齊人であると認識されていたことから、漢代においては縱横家が齊地で盛んに活動していたことが窺える。辯舌と策謀に長けていたとして齊地に名が知られていた蘇秦が假託の對象として縱横家の輩に選ばれたことはごく自然な流れであった。しかしながら、如何に策謀に優れていたとしても、蘇秦の如き一國を滅亡に導いたとされる人物は世人、とりわけ統治階級に屬する人々に受容され難かったであろう。そこで、縱横家は既に成立していた蘇秦說話の中から、自らに好都合な要素のみを取り上げて强調することにより、從來と大きく異なる蘇秦說話を生み出した。すなわち、齊燕說話にも既に見られる、諸侯を率いて秦を攻擊する說話のみを强調し、反閒活動と密接にかかわる齊や燕を後景に退けて否定的印象の拂拭を圖ったのである。秦を打倒して統一を果たした漢代においては、「暴秦」に抗するという構圖が受け入れられやすかったことも、合從說話形成の背景にあろう。秦王が蘇秦に對して强い敵愾の念を示す情景を描いた『戰國策』秦策の說話も、やはりかかる意圖に沿って爲られたものである。[43] そして、傳世文獻にみえる蘇秦說話のうち、數量において合從說話が齊燕說話に勝ることから、彼らの意圖は成功を收めたとも言える。[44] また、『荀子』からも看取できるように、戰國期の齊において、蘇秦が亡國の張本として否定的評價を與えられていたことも、合從を果たした英雄として蘇秦を假託の對象に取り上げた時期が、田齊と直接的な關わりを持たなくなった漢代以降であるとの推測を支持する。

次に問題となるのは六國遊說辭であるが、これらが秦一2に着想を得て創り上げられたものであることは第一章で觸れた。しかし、秦一2と六國遊說辭の閒には蘇秦像に關する極めて重要な變化が生じている。それはすなわち蘇秦と張儀を相對立する縱横家の兩雄とする認識である。『史記』において、張儀は蘇秦と師を共にし、蘇秦の助力により秦國に仕え、秦の爲に連衡を說いた人物とされており、兩者の深い關係が描寫されている。

六國の君に向けた蘇秦と張儀の遊說辭は『史記』及び『戰國策』に收められているが、張儀の遊說辭の中には蘇秦に言及する文言がある。

張儀　秦の爲に從を破り連横せんとして、楚王に說きて曰く「…凡そ天下の信じて從親を約して堅き所の者は蘇秦なり。封ぜられて武安君と爲り、燕に相たるや、卽ち陰かに燕王と齊を破り共に其の地を分かたんことを謀る。乃ち罪あるを佯り、出で走りて齊に入る。齊王因りて受けて之を相とす。居ること二年にして覺われ、齊王大いに怒り、蘇秦を市に車裂す。夫れ一詐僞反覆の蘇秦を以て天下を經營し、諸侯を混一せんと欲するも、其の成るべからざるや亦た明らけし…」楚王…乃ち車百乘を遣わし、雞駭の犀・夜光の璧を秦王に獻ず。（『戰國策』楚策一・張儀爲秦破從連横章）[45]

張儀秦の爲に連横せんとし、趙王に說きて曰く「…凡そ大王の信じて以て從を爲す所の者は、蘇秦の計を恃むなり。諸侯を熒惑し、是を以て非と爲し、非を以て是と爲し、齊國を反覆せんと欲するも能わず、自ら齊の市に車裂せしむ。夫れ天下の一にすべからざるは亦た明らけし…」趙王…乃ち車三百乘を以て澠池に入朝し、河間を割きて以て秦に事う。（『戰國策』趙策二・張儀爲秦連横章）[46]

この文からは　①蘇秦が合從を成立させ、②燕王と圖って齊を破ろうとし、③車裂に死したこと、及び　④張儀が蘇秦の成立させた合從を破った、という認識が看取され、蘇秦と張儀が相前後する人物として關係附けられていることは明らかである。しかしながら、これまで辿ってきた六國遊說辭の成立に至るまでの說話展開の中には、蘇秦と張儀を關聯附ける記述が全く見えない。[47]そこで、一體どの時點で蘇秦と張儀を相對立する人物として扱う說話が發生したのか、が問題となる。これは、蘇秦張儀を修飾する常套句ともなった「合從連衡」という認識がいつ生じたのか、という問題とも關わる。

戰國末に成書したであろう『韓非子』には合從と連衡を對比する表現が見える。

從なる者は衆弱を合して以て一强を攻むるなり。而して衡なる者は一强に事えて以て衆弱を攻むるなり。（『韓非子』五蠹）[48]

これは、戰國末には「合從」と「連衡」を對比する考えが既に生じていたことを示すが、蘇秦や張儀との關係は不明であ

る。ただ、抗秦と蘇秦について言うならば、『戰國縱横家書』等の齊燕説話には、蘇秦が諸國を率いて秦を伐った記述があることから、戰國末、或いは漢初には既に關聯附けられていた。しかし、「合從」は用いられ始めた當初、抗秦のみを指す語ではなかったことが指摘されている。[49]

燕昭王…樂毅をして趙惠文王を約せしめ、別に楚魏を連ねしめ、趙をして秦に嚙わすに伐齊の利を以てせしむ。諸侯齊湣王の驕暴なるを害み、皆爭いて合從し、燕と齊を伐つ。（『史記』樂毅列傳）[50]

樂毅が諸侯を率いて齊を伐ったことも「合從」と稱されており、齊燕説話において樂毅と同時期に燕昭王に仕えて伐齊に從事した蘇秦が、抗秦に限定されない廣義の「合從」と結び附けられた可能性は存在する。ただし、蘇秦の「合從」と張儀の「連衡」という對立した構圖においては、當然ながら蘇秦が抗秦の合從に關與していることが求められる。これに關しては、例えば『戰國縱横家書』第四章に「齊勺（趙）遇於阿、王憂之、臣與於遇、約功（攻）秦去帝」とあり、蘇秦が攻秦の同盟に與っていたとされている。後世の如く合從の長としては扱われていないが、『戰國縱横家書』が成立した時點で、攻秦同盟の成立に關して何らかの役割を擔う人物として見做されていたことは首肯されよう。

しかし、この抗秦の合從と蘇秦が結び附けられていたことを確言できるのは年代的にさらに下る。その認識は、淮陰出身の辯士である枚乘が、吳楚七國の亂に際して吳王に説いた發言中に見える。

六國信陵の籍に乘じ、蘇秦の約を明らかにし、荊軻の威を厲まし、力を幷せ心を一にして以て秦に備う。（『漢書』賈鄒枚路傳）[51]

とあり、漢景帝期（前一五六～前一四一年）には蘇秦が抗秦同盟の中心人物として認識されていたことがわかる。

次いで、連衡が張儀と關聯附けられた時期を檢討する。「連衡」が戰國末の文獻において「合從」と對應する用語として擧げられていることは先に見たが、「連衡」策は概ね秦に關聯して述べられており、このような認識の存在は賈誼にも確認できる。

秦孝公殽函の固に據り、雍州の地を擁し、君臣固守して周室を闚い、天下を席巻し、宇内を包舉し、四海を囊括せんとするの意、八荒を幷呑せんとするの心有り。是の時に當るや、商君之を佐け、内は法度を立て、耕織に務め、守戰の備を修め、外は連衡して諸侯と鬬う。（『過秦論』）[52]

秦が連衡策を採用して關東の諸國と争ったという認識は漢文帝期（前一七九～前一五七年）には存在していた。ただし、指摘すべきは、この時點では連衡が商鞅の時代のこととされており、未だ張儀との關係性は認められない、という事實である。[53]

「蘇秦の合從」と「張儀の連衡」という對立的構圖の認識を明確に示す記述は『淮南子』に初見する。

張儀蘇秦 家に常居無く、身に定君無く、從衡の事を約し、傾覆の謀を爲し、天下を濁亂し、諸侯を撓滑し、百姓をして啟居に遑あらざらしめ、或いは從、或いは横、或いは衆弱を合し、或いは富强を輔く。此れ行いを異にするも醜に歸する者なり。（『淮南子』泰族訓）[54]

張儀・蘇秦の從衡、皆掇取の權にして、一切の術なり。（『淮南子』泰族訓）[55]

『淮南子』は前一三九年頃の成書とされており、蘇秦と張儀を詭計に富み、合從連衡に從事して天下を脅かした人物とする、合從連衡と蘇秦張儀を軸とした說話が武帝初年には既に存在したことがわかる。かかる說話の存在を考慮すれば、

建元元年冬十月、丞相・御史・列侯・中二千石・二千石・諸侯相に詔して賢良方正直言極諫の士を舉げしむ。丞相綰奏すらく「舉ぐる所の賢良、或いは申商韓非蘇秦張儀の言を治め、國政を亂す。請う皆罷めん」と。（『漢書』武帝紀）[56]

武帝の時、齊人に東方生名は朔なるもの有り…時に宮下の博士諸先生を會聚して與に論議するに、共に之を難じて曰く「蘇秦張儀一たび萬乘の主に當りて卿相の位に都り、澤後世に及ぶ…」東方生曰く「…夫の張儀蘇秦の時、周室大いに壞れ、諸侯朝せず、力政して權を爭う…方今天下の大、士民の衆を以て、精を竭して馳說し、幷進輻湊する者、勝げて數うべからず。力を悉くして義を慕うも、衣食に困しみ、或いは門戸を失う。使し張儀蘇秦 僕と幷びて今の

世に生くれば、曾ち掌故も得る能わず。安んぞ敢えて常侍侍郎を望まんや」。（『史記』滑稽列傳）[57]

にある「蘇秦張儀」と竝稱する記述も同様の認識に基づくものとしてよいだろう。なお、東方朔の言によれば、武帝期には縱横家の評價が相當に低下していたことも明らかである。これらを要すれば、遅くとも武帝期には蘇秦と張儀を縱横家の兩雄であるとする認識が成立し、かつ廣範に共有されていたことがわかる。さらに、『淮南子』に載る蘇秦の記述からは、蘇秦傳に描かれたような說話が『史記』以前に既に存在したことが窺える點で重要な意義を持つ。

蘇秦、匹夫徒步の人なり。靻蹻羸蓋して、萬乘の主を經營し、諸侯を服諾す。然れども自ら車裂の患を免れず。（『淮南子』氾論訓）[58]

この記述は簡潔な要約となっており、前提としている說話の細部を知ることは困難であるが、①卑賤から身を起こし、②諸侯を從え、③車裂に死した、という蘇秦傳に描かれた記述と共通する內容をもっている。そしてここからは、合從說話と齊燕說話、及び蘇秦張儀の對立といった要素を含む說話を背景とした六國說辭が、概ね武帝期初年までには成立していたことが認められる。また、『戰國縱横家書』が長沙に傳えられていたことは、齊燕說話が漢初には既に楚地で知られていたことを示しているが、遅れて成立した合從說話も武帝初年には普及していたと考えられる。また、右記の『淮南子』の記述でとりわけ注目されるのは、蘇秦が車裂に死した、とあることである。成立年代が確定できない張儀の六國遊說辭を除けば、この記述が蘇秦車裂說の初出であり、車裂に死すという末路が蘇秦說話の中でもかなり遅れて考案されたことがわかる。『戰國縱横家書』を是として、蘇秦列傳を誤りとする研究者の著述においても、蘇秦が車裂に處された、という記述が屢々見られるが、車裂に關してのみ、より後代に展開した說話を史料として採用していることとなり、從い難い。そして『淮南子』のもう一つの特徵は蘇秦に對する否定的な評價である。詮言訓や前引の泰族訓・氾論訓の記述からは、蘇秦を智謀の士と認めつつも、決して好意的には捉えていないことが知られる。[59] 蘇秦の英雄的形象を描いた合從說話が當時流布していた可能性を考慮すれば、この否定的評價は、『淮南子』編纂者たちが合從說話の作り手たちとは性格

を異にする集團であったことを示しているのであろう。

第三章　司馬遷と蘇秦傳

第一章・第二章を通して、齊滅亡から武帝期に至るまでの蘇秦説話の發生と展開、及び蘇秦傳が『史記』に先行して成立した種々の説話を組み合わせて作り上げられたことを明らかにした。本章では、司馬遷が先行する史料をどのように取捨選擇・配列し、如何なる意圖をもって蘇秦傳を創り上げたのか、を檢討する。

まず、司馬遷が蘇秦傳を著した意圖を彼自身の書き記した文章に據って示す。

蘇秦兄弟三人、皆諸侯を游説して以て名を顯す。其の術權變に長ず。而して蘇秦反閒を被りて以て死し、天下共に之を笑い、其の術を學ぶを諱む。然れども世蘇秦を言いて異多く、異時事之に類する者あれば皆な之を蘇秦に附す。夫れ蘇秦閭閻より起き、六國を連ねて從親せしむ。此れ其の智人に過ぐる者有り。吾故に其の行事を列し、其の時序を次(つ)じ、獨り惡聲を蒙らしむること毋からんとす。(『史記』蘇秦列傳贊)[60]

天下衡秦の饜く毋きを患うるも、蘇子能く諸侯を存し、從を約して以て貪彊を抑う。蘇秦列傳第九を作る。(『史記』太史公自序)[61]

夫れ張儀の行事蘇秦より甚だし。然れども世蘇秦を惡む者は、其の先に死するを以てなり。而して儀其の短を振暴して以て其の説を扶け、其の衡道を成す。之を要するに、此の兩人眞に傾危の士なるかな。(『史記』張儀列傳贊)[62]

ここからは　①蘇秦が權變の術に長じ、②諸侯を約して「貪彊」(秦)を抑えたが、③反閒の汚名を被って死んだこと、及び張儀に先んじて世を去り、張儀が蘇秦の短を暴露したために惡評が廣まったこと、そして④様々な説話が蘇秦に附會された、という認識が讀み取れる。當時の史料狀況を把握し得ない今日、司馬遷が如何にしてかかる認識を抱くに至ったかは明らかにし難いが、蘇秦列傳を著した意圖は「毋令獨蒙惡聲焉」に明示されるように、蘇秦を擁護し、その惡名を

雪ぐことにあった。現行の蘇秦傳が何故今ある姿となったのか、ということを考察する際には、かかる認識と意圖を前提としておく必要がある。

さて、武帝期に丞相綰・東方朔に加え博士諸先生までもが「蘇秦張儀」と竝稱していたことからは、『史記』執筆の當時、兩者を同時代とする說話が流行していたことがわかり、司馬遷が蘇秦と張儀の對立を背景とする六國說辭を採用したことは極めて自然であったと言えよう。そして、蘇秦が張儀に先行するという認識から、蘇秦を秦惠王期（前三三七～前三一一）の人物として描いている秦一2の如き說話を背景に選擇したと思われる。燕文侯二十八年（前三三四年）に蘇秦が燕に遊說したという記述が、前三一八年の五國抗秦の事件から十五年遡って得られた年次であることは既に指摘されているが、この前三一八年の諸國同盟に蘇秦が關與したとする判斷も、やはり蘇秦を秦惠王期の人物とする認識によるものであろう。[63] そして、かかる年代觀、すなわち前三三〇～前三二〇年代という活動時期が蘇秦列傳全體の大きな枠組みとなり、ここから逸脫するものは原則的に「異時事」と判斷され、採用されなかったようである。

ただし、「原則的に」と留保をつけたのには理由がある。というのも、蘇秦傳編纂に際しての史料の取捨選擇は機械的なものではなかったと思われるからである。以下ではそれについて述べよう。

蘇秦傳前半が秦一2を基礎として、改變を加えられていることは既述したが、實例としては奉陽君の說話が擧げられる。

蘇秦…乃ち東のかた趙に之く。趙肅侯其の弟成をして相爲らしめ、奉陽君と號す。奉陽君之を說ばず、去りて燕に游ぶ。（『史記』蘇秦列傳）[64]

これは蘇秦の第一次訪趙時の記述であるが、奉陽君に拒絕されて趙を去り、燕に赴いたとされている。しかし、秦一2には奉陽君への言及は皆無であり、『史記』編纂段階での插入と考えられる。また、奉陽君は『戰國策』『戰國縱橫家書』にも見える人物であるが、概ね紀元前二八〇年代の燕齊趙に關わる說話において言及されていることに加え、『史記』の「公子成」が紀元前三三〇年代に「奉陽君」として趙相に任ぜられていた、という記述は他に見えない全く孤立した情報

であって、その信憑性には問題がある。[65] では、『史記』が公子成＝奉陽君説を主張するのは何故であろうか。その原因はおそらく、奉陽君を蘇秦と同時代とする史料が數多く存在しており、蘇秦列傳の編纂に際して、それらの情報を完全には放棄できなかったためであろう。故に司馬遷は、『戰國策』にも見られる奉陽君が遊説に來た蘇秦を悅ばなかった、というような説話を簡略化して插入したのだと思われる。第一章でも言及したが、『史記』における遊説失敗→勉學→失敗→成功という展開の不自然さは、起源を異にする説話を取り込んだことに由來する。蘇秦傳のかかる編纂態度からは、司馬遷が枠組みに適合しない史料であっても一律に排除したのではないことがわかる。

その編纂方式に關して、別の一例を擧げよう。蘇秦傳の末尾は蘇秦の齊における最後の行動を次のように記述している。

蘇秦詳りて罪を燕に得たりと爲し、亡げて齊に走り、齊宣王以て客卿と爲す。齊宣王卒し、湣王位に卽くや、湣王に厚葬して以て孝を明らかにし、宮室を高うし苑囿を大にして以て得意を明らかにせんことを說く。齊を破敝して燕の爲にせんと欲するなり。[66]（『史記』蘇秦列傳）

ここでは、蘇秦が燕のために齊を疲弊させることを目的として、齊王に奢侈を勸めている。これは『史記』のみに見える説話であるが、注目されるのは、蘇秦が説いた王が湣王とされていることである。本來、齊の疲弊のみが目的であるならば、どの齊王であるか自體は重要な問題ではないはずであるが、ここでは宣王の卒と湣王への勸説を特に記しているのである。これは、『史記』が自らの編年に從うことで、蘇秦を齊湣王の末年まで活動させることは不可能となっても、何らかの形で齊湣王の敗滅に關與させようという意圖のもとになされた記述と考えられる。

さらに、原資料では蘇秦の説話とされていたものが、『史記』蘇秦列傳ではしばしば蘇代・蘇厲の説話に改變されていることが、先行研究によって明らかにされている。[67] この事實もやはり、『史記』編纂に際して、先行する史料を極力利用しようとする意圖を證している。

現存する説話から考えれば、蘇秦説話の年代觀でもっとも時期が早いものは秦惠王期であり、『史記』がその年代觀を

採用した以上、時期的に適合せず、蘇代・蘇厲のものに改變された説話は、必然的に蘇秦傳以降に附されることとなる。その結果、『史記』においては蘇代・蘇厲を蘇秦の弟と見做すこととなった。かかる認識は、原史料である秦一2及び『史記』の對應箇所を比較すれば、『史記』段階でなされたと推測できる。

出游すること數歲、大いに困しみて歸るに、**兄弟**嫂妹妻妾竊かに皆これを笑う。（『史記』蘇秦列傳[68]）

秦王に說きて書十たび上るも說行われず…歸りて家に至るに、妻は紝を下らず、嫂は爲に炊がず、父母は與に言わず。（秦一2[69]）

蘇秦…乃ち行きて雒陽を過るに、車騎輜重、諸侯各使を發して之を送ること甚だ眾く、王者に疑す。周顯王之を聞き、恐懼して道を除し、人をして郊勞せしむ。蘇秦の**昆弟**妻嫂目を側めて敢えて仰視せず、俯伏して侍して食を取る。（『史記』蘇秦列傳[70]）

父母之を聞き、宮を清め道を除し、樂を張り飲を設けて、郊迎すること三十里。妻は目を側めて視、耳を傾けて聽き、嫂は蛇行匍伏、四拜して自ら跪謝す。（秦一2[71]）

『史記』では二例とも『戰國策』に見えない「兄弟」「昆弟」といった弟の存在を示唆する文言が附加されている。

さらに、蘇秦と張儀の關係においても『史記』の獨創に係るのではないかと思われる事例がある。確かに、武帝期には既に竝稱されていることからも、蘇秦と張儀の結びつきは『史記』成立以前であると言えよう。しかし、蘇秦が張儀を陰ながら補佐し、秦への仕官を援助する、という張儀列傳に記されたような逸話は他の文獻にみられない記述であり、このような蘇秦と張儀のある種の友情とも言うべき關係は、或は『史記』獨自の見解を示しているのではないかと思われるのである。そこで、まず指摘すべきは、蘇秦列傳には張儀との關係を示唆する文言が一例を除いて存在しないことである。またその唯一の例からは、蘇秦列傳と張儀列傳との間には兩者の關係について、認識の變化が生じていたのではないかということが推察される。

蘇秦已に趙王に說きて相約して從親せしむるを得たり。然れども秦の諸侯を攻め、約を敗り後に負かんことを恐る…趙王に言いて、金幣車馬を發し、人をして微かに張儀に隨わしめ…奉ずるに車馬金錢を以てす…張儀遂に以て秦惠王に見ゆるを得、惠王以て客卿と爲す…舍人曰く「…蘇君秦の趙を伐ち從約を敗らんことを憂え、以爲らく君に非ざれば能く秦柄を得るもの莫からん、と。故に君を感怒せしめ、臣をして陰かに君に資を奉給せしむ。盡く蘇君の計謀なり…」…張儀曰く「…吾が爲に蘇君に謝せ。蘇君の時、儀何をか敢えて言わん。且つ蘇君在らば、儀寧渠(いずく)んぞ能くせんや」。(『史記』張儀列傳)[72]

ここでは、秦によって從約が破られることを危惧した蘇秦が、張儀を援助して秦に送り込む、ということが記述されている。しかしながら、蘇秦列傳の對應する文と比較すると、その不自然さが明らかとなる。

是の時周天子文武の胙を秦惠王に致す。惠王犀首をして魏を攻めしめ、將龍賈を禽え、魏の雕陰を取り、且つ兵を東せんと欲す。蘇秦秦兵の趙に至らんことを恐るるや、**乃ち張儀を激怒せしめ、之を秦に入る**…六國從合して力を幷す…其の後秦犀首をして齊魏を欺かしめ、與に共に趙を伐ち、從約を敗らんと欲す。齊魏 趙を伐ち、趙王蘇秦を讓む…蘇秦趙を去りて從約皆解く。(『史記』蘇秦列傳)[73]

このうち、「是時周天子致文武之胙於秦惠王。惠王使犀首攻魏、禽將龍賈、取魏之雕陰、且欲東兵。蘇秦恐秦兵之至趙也、乃激怒張儀、入之于秦」という記述は、『戰國策』に由來する二說話に挾まれており、『史記』編纂段階で加えられた接續の語である。さて、六國年表に據れば「齊魏伐趙」は前三三二年であり、蘇秦列傳では、その後まもなく合從が崩壞したと記述されている。つまり、合從は僅かに一、二年で破られたことになり、張儀を秦に送り込むという說話はその存在意義を喪失しているのである。考えられるのは、蘇秦列傳編纂段階では蘇秦と張儀の關係を張儀列傳のような形では認識していなかったが、張儀列傳編纂段階で、蘇秦が張儀を秦に送り込むという說話を採用し、この說話を再び蘇秦列傳に插入したのではないか、ということである。蘇秦列傳が張儀に言及するのはここに擧げた一例に過ぎないのに比して、張儀列

傳では論贊も含め十七箇所に蘇秦の名が見えることも、蘇秦と張儀のこのような關係性が張儀列傳編纂時に認識された可能性を支持しよう。

加えて、蘇秦が張儀を援助するという張儀列傳の說話は『史記』以外の文獻に見えない。この點に關しては『呂氏春秋』に類話が見え、個々の人名などは異なるものの、說話の骨格は共通していることが注目される。

張儀、魏氏の餘子なり、將に西のかた秦に遊ばんとして東周を過る。客之を昭文君に語ぐる者有りて曰く「魏氏の人張儀、材士なり。將に西のかた秦に遊ばんとす。願わくは君の之を禮貌せんことを。」…張儀行らんとし、昭文君送りて之に資す。秦に至りて、留むること閒有り。惠王說びて之を相とす。張儀の天下に德とする所の者、昭文君に若くは無し。（『呂氏春秋』報更）[74]

蘇秦が張儀を秦に送り込むという說話が『呂氏春秋』報更の說話のヴァリアントであることに疑念の餘地はない。しかしながら、蘇秦と張儀の關係性の構築が前漢に下ること、そして蘇秦列傳における張儀の記述が僅少であることから、張儀列傳の說話自體は或いは『史記』の創出に係るのではないかと考える。蘇秦による張儀への好誼と支援を描いた理由としてまず擧げられるのは、兩列傳の編纂意圖が蘇秦・張儀列傳贊にあるように、蘇秦の惡名を雪ぎ、正當な評價を與えることにあったことである。また、連衡策を以て秦に仕えた人物として著名であった張儀を翻弄する、という構成は前漢の上層に位置する人々に共通して存在する、「暴秦」への批判意識に影響されたことが指摘できるだろう。

結論

三章の考察から得られた結論を記す。

蘇秦說話は、齊湣王の敗滅に關わる說話が最も早期に發生し、そこから齊燕閒さらに齊燕趙の閒で活動する說話が展開した。次いで、縱橫家はそれらの說話に胚胎する抗秦の要素をもとにして、趙を中心とする合從說話を創出した。かかる

説話は漢代以降の縱横家の需要に從って生み出されたものと考えられる。その後、それら先行する説話に着想を得て、『淮南子』に記錄されたような、合從説話に齊燕説話を取り入れた形の説話が作り出された。六國合從説辭もかかる説話を背景としている。また、この時點で蘇秦と張儀の對立關係という構圖も發生し、その下限は武帝期と定められる。

そして、司馬遷は『史記』編纂當時により盛行していたであろう蘇秦と張儀の對立説話の年代觀を蘇秦列傳全體の枠組に採用し、合從説話と齊燕反間説話を中心として、さらにそれ以前に成立していた種々の説話を附加して蘇秦列傳を作成した。その際には、奉陽君などの事例に見えるとおり、矛盾する史料をも一律に排除するのではなく、時代や人物などの點で何らかの改變を加えて取り込んでいる場合がある。

かかる結論に據れば、『史記』蘇秦列傳の記載が史實を傳えているとする見解はもはや認めることはできない。しかしながら、現在定論となった觀のある、『戰國縱横家書』の描く蘇秦像が正確であるとの説にも仍お問題が存する。現在の史料狀況から言えることは、六國合從説話より『戰國縱横家書』の描く蘇秦像がより早期に形成された、ということのみである。『戰國縱横家書』が齊湣王の敗滅から約一世紀を隔てていることから考えても、その史實性が確證されたとするのは仍お難い。その點からいえば、司馬遷が誤解によって眞實の蘇秦資料を放棄し、僞の史料を採用したという批判は適切さを缺いたものと言わざるを得ないだろう。

他方、『史記』の記述を緻密に分析し他文獻との比較を行うことで、個々の原史料へと解體し、包括的に整理檢討することで説話や思想史の展開を辿ることも可能であるように思われる。かかる意味において、『史記』が様々な矛盾する史料を保存しているということは、むしろ極めて貴重であると言えよう。

本稿では主に蘇秦列傳を中心として考察を進めてきた。しかし、他文獻、特に『戰國策』には、本稿で觸れることのできなかった蘇秦説話が數多く保存されている。例えば、東周策や西周策の説話は蘇秦が周君に獻策する姿を描いているが、蘇秦列傳にも蘇秦が周顯王を訪れる場面がある。蘇秦が洛陽の出身と傳えられていることからも、蘇秦と周との間に何ら

かの關係があることは疑いなく、蘇秦の周における活動を記した說話群の展開を推測させる。また、殘された蘇秦說話の中でも特に檢討に値すると思われるのは、楚に關わる說話である。『戰國策』中の諸策、とりわけ楚策には、蘇秦が楚王に遊說する場面が屢々見える。『史記』が楚世家においては「懷王…十一年、蘇秦約從山東六國共攻秦」と明記するにもかかわらず、蘇秦列傳でその記述を全く放棄していることを考え合わせると、所謂蘇秦の楚說話とも言うべきものが蘇秦說話全體においてどのように位置附けられるのか、という問題は『史記』の編纂方針やその變化などを辿る上で重要な意義を持ってくるのではないだろうか。

また、『史記』と『戰國策』及び他の傳世文獻を比較檢討することで、蘇秦に限られず、戰國より秦漢にかけての人物形象の展開、出來事の認識の變化、思想の發展過程などの解明が可能であると思われる。そこから得られるであろう成果は戰國の史實を究明するための基礎であり、以後の課題としたい。

註

（1）『通鑑考異』「（顯王）三十六年蘇秦約六國從」條に「史記蘇秦傳、秦兵不敢闚函谷關十五年、又云其後秦使犀首欺齊魏與共伐趙、蘇秦去趙而從約皆解、齊魏伐趙敗從役止明年耳、其自相違戾如此、秦本紀惠文王七年公子卬與魏戰虜其將龍賈後二年事耳、烏在不闚函谷十五年乎、此出於遊談之士、誇大蘇秦而云爾、今不取」とあり、また『古史』卷四十蘇秦列傳第十七には「…然口血未乾、犀首一出而齊趙背盟從約皆破、蓋諸侯異心譬如連鷄不能俱飛勢固然矣、而太史公以爲約書入秦、秦人爲之閉函谷者十五年、此說客之浮語而太史公信之過矣」とある。

（2）Maspero 1950, pp. 53-62.

（3）錢穆一九五六、九五「蘇秦考」。

（4）楊寬一九五五、一六五～一六六頁。

（5）徐中舒一九六四。

（6）諸祖耿一九八二、二〇一七～二〇四六頁「關於《戰國策》及蘇秦問題與徐中舒先生商榷」。

（7）馬王堆漢墓帛書整理小組編一九七六、一二三～二〇一頁。

（8）例えば趙生群二〇〇七は『戰國縱橫家書』の蘇秦に關する記述の信憑性を否定し、『史記』の記述を信頼すべきであると主張する。

(9) 『戰國策』秦策一・蘇秦始將連横章「蘇秦始將連横說秦惠王…說秦王書十上而說不行…歸至家、妻不下紝、嫂不爲炊、父母不與言、蘇秦喟歎…乃夜發書、陳篋數十、得太公陰符之謀、伏而誦之、簡練以爲揣摩…朞年揣摩成…見說趙王於華屋之下、抵掌而談、趙王大悅、封爲武安君、受相印」。

(10) 『戰國策』秦策一・蘇秦始將連横章「蘇秦曰嗟乎、貧窮則父母不子、富貴則親戚畏懼。人生世上、勢位富貴、蓋可忽乎哉」。

(11) 『戰國策』秦策一・蘇秦始將連横章「將說楚王、路過洛陽。父母聞之、清宮除道、張樂設飲、郊迎三十里」。

(12) 『戰國策』齊策一・蘇秦爲趙合從章、楚策一・蘇秦爲趙合從說楚威王章、趙策二・蘇秦從燕之趙章、魏策一・蘇子爲趙合從說魏王章、韓策一・蘇秦爲楚合從說韓王章、燕策一・蘇秦將爲從北說燕文侯章の六章が『史記』蘇秦列傳所載の六國の君主へ向けた遊說辭の原史料であろう。

(13) 『戰國策』秦策一・蘇秦始將連横章「蘇秦…說秦惠王曰大王之國、西有巴蜀漢中之利」。

(14) 『戰國策』楚策一・蘇秦爲趙合從說楚威王章「…秦有舉巴蜀幷漢中之心」。

(15) 『戰國策』秦策一・蘇秦始將連横章「趙王大悅、封爲武安君、受相印、革車百乘、綿繡千純、白璧百雙、黃金萬溢、以隨其後」。

(16) 『戰國策』趙策二・蘇秦從燕之趙始合從章「乃封蘇秦爲武安君、飾車百乘、黃金千鎰、白璧百雙、錦繡千純、以約諸侯」。

(17) すなわち、『戰國策』燕策四・燕文公時章の冒頭「燕文公時、秦惠王以其女爲燕太子婦、文公卒、易王立、齊宣王因燕喪攻之、取十城」は、記述の內容についてのみ言えば、『史記』蘇秦列傳の「秦惠王以其女爲燕太子婦、是歲、文侯卒、太子立、是爲燕易王、易王初立、齊宣王因燕喪伐燕、取十城、易王謂蘇秦曰…蘇秦大慙曰請爲王取之」の要約となっている。なお、ここに見える秦惠王の女を燕の太子に嫁がせた、という記述には問題があることが指摘されており、例えば范祥雍は「燕文公卒年當秦惠王五年（前三三三）。惠王立三年、始冠（見秦本紀）、卽位時年十九（見秦始皇本紀）、冠年二十二。國君冠而後始成婚。惠王於三年始冠、何能越二年卽有女爲燕太子婦？」とする（范祥雍二〇〇六、一六五三頁）。また、楊寬が考證するように、齊の伐燕は齊宣王による子之への攻擊であり、燕文公の喪に乘じた燕易王への攻擊には疑問がある（楊寬一九九八、七二七～七二九頁）。なお、『史記』は一國の他國への進出の理由として、「因喪」を擧げることがあるが、齊世家「齊威王元年、三晉因齊喪來伐我靈丘」にも確認できるように、史實と抵觸する場合があり、これはおそらく『史記』編纂時における插入であると考えられる。

(18) なお、「孝信廉」の配列自體も『戰國縱横家書』第五章と燕一14がより近い關係にあることを證する。すなわち、『史記』蘇秦列傳及び燕一5が「孝－廉－信」若しくは「信－廉－孝」の順に列擧するのに對し、『戰國縱横家書』

第五章及び燕一14は等しく「孝—信—廉」の配列となっている。

(19) 『戰國縱横家書』第五章は字句においても燕一14と近い關係にある。例えば『戰國縱横家書』第五章の「三王代立、五相（伯）蛇（弛）正（政）」は燕一14では「三王代位、五伯改政」となっており、燕一5の「三王代興、五覇迭盛」に比べて文章表現がより類似している。また『戰國縱横家書』の「臣願辭而之周、負籠操首（面）、毋辱大王之廷」は燕一14の「若自憂而足、則臣亦之周負籠耳、何爲煩大王之廷耶」と概ね同様の內容だが、燕一5にはこの箇所に對應する文言は無い。

(20) 『呂氏春秋』知度「夫成王霸者固有人、亡國者亦有人。桀用羊辛、紂用惡來、宋用駛唐、齊用蘇秦、而天下知其亡」。

(21) 『荀子』臣道「內不足使一民、外不足使距難、百姓不親、諸侯不信、然而巧敏佞說、善取寵乎上、是態臣者也。…用態臣者亡。態臣用則必死、…故齊之蘇秦・楚之州侯・秦之張祿、可謂態臣者也」。

(22) 『說苑』君道「燕昭王問於郭隗曰寡人地狹人寡、齊人削取八城、匈奴驅馳樓煩之下。以孤之不肖、得承宗廟、恐危社稷、存之有道乎。…郭隗曰王誠欲興道、隗請爲天下之士開路。於是燕王常置郭隗上坐南面。居三年、蘇子聞之、從周歸燕、鄒衍聞之、從齊歸燕、樂毅聞之、從趙歸燕、屈景聞之、從楚歸燕。四子畢至、果以弱燕幷强齊」。

(23) 『說苑』尊賢「燕昭王得郭隗而鄒衍樂毅以齊趙至、蘇子屈景以周楚至。於是舉兵而攻齊、棲閔王於莒。燕校地計衆、非與齊鈞也。然所以能信意至於此者、由得士也」。

(24) 『史記』樂毅列傳「樂毅…及武靈王有沙丘之亂、乃去趙適魏。聞燕昭王以子之之亂而齊大敗燕、燕昭王怨齊、未嘗一日而忘報齊也。燕國小辟遠、力不能制、於是屈身下士、先禮郭隗以招賢者。樂毅於是爲魏昭王使於燕。燕王以客禮待之。樂毅辭讓、遂委質爲臣。燕昭王以爲亞卿、久之」に據れば、樂毅は沙丘の亂（前二九五）の後、先ず魏に行き、次いで燕に赴いたことになる。

(25) その年代觀に合致しない場合、『史記』においては蘇秦の名が削除される、あるいは「蘇代」など他の人名に書き換えられることがあったことは徐中舒一九六四に指摘がある。ここに擧げた『說苑』の文は『史記』の年代觀に從ったものであろう。

(26) 『戰國縱横家書』第一章から第十四章に至るまでが蘇秦に關わる史料であることについては、馬王堆漢墓帛書整理小組編一九七六所收の唐蘭「司馬遷所沒有見過的珍貴史料」、楊寬「馬王堆帛書《戰國縱横家書》的史料價値」、馬雍「帛書《戰國縱横家書》各篇的年代和歷史背景」が等しく認めており、現在多くの研究者が贊意を表している。また、日本においては大西・大櫛二〇一五が「蘇秦との關係」（二一四～三一頁）という章を設けてこの問題を論じており、基本的には蘇秦の史料であると認めてよいとする。

(27) 『戰國縱横家書』に第七章「…臣故令遂恐齊王曰、天下不能功（攻）秦、□道齊以取秦…」、八章「…王棄薛公、

身斷事、立帝、帝立、伐秦、秦伐…」、第十一章「…臣至勺（趙）、所聞於乾（韓）梁（梁）之功（攻）秦、无變志矣…臣之所得於奉陽君、乾（韓）梁（梁）合、勺（趙）氏將悉上黨以功（攻）秦…」、十二章「自勺（趙）獻書於齊王曰、臣以令告奉陽君曰…寡人之所爲功（攻）秦者、爲梁（梁）爲多…」、第十四章「謂齊王曰…非薛公之信、莫能合三晉以功（攻）秦…功（攻）秦之事成、三晉之交完於齊…功（攻）秦之事敗、三晉之約散…是故臣以王令甘薛公、驕敬三晉、勸之爲一、以疾功（攻）秦、必破之…今功（攻）秦之兵方始合…」とあるが、「臣」はおそらく蘇秦であり、かつこれらの章は全て攻秦に言及している。

(28) 『戰國縱横家書』第十章「兄（況）臣能以天下功（攻）秦、疾與秦相萃（捽）也而不解」。訓讀は大西・大櫛二〇一五に從う。

(29) 『戰國策』魏策二・五國伐秦無攻而還章「臣又偏事三晉之吏、奉陽君・孟嘗君・韓呡・周𠭯・周・韓餘爲徒從而下之。恐其伐秦之疑也、又身自醜於秦扮之、請焚天下之秦符者、臣也。次傳焚符之約者、臣也。欲使五國約閉秦關者、臣也。」ここでは鮑本に從って「欲」を「次」に改める。

(30) 『史記』張儀列傳「三晉多權變之士。夫言從衡彊秦者大抵皆三晉之人也」。

(31) 苗潤蓮二〇〇六は國別に戰國期の縱横家の統計をとっているが、そこに擧げられた一二九人の内、趙國の縱横家は二〇人を數える。戰國期の趙において、縱横家の活動が盛んであったことが知られる。

(32) 『戰國策』秦策一・蘇秦始將連横章「當此之時、天下之大、萬民之衆、王侯之威、謀臣之權、皆欲決蘇秦之策。不費斗糧、未煩一兵、未戰一士、未絕一弦、未折一矢、諸侯相親、賢於兄弟」。

(33) 『韓詩外傳』卷九「孔子曰…賜、爾何如。對曰得素衣縞冠、使於兩國之閒、不持尺寸之兵、斗升之糧、使兩國相親如弟兄」。

(34) 熊憲光一九九七は『韓詩外傳』の子貢の言と秦策一・蘇秦始將連横章の文章表現の類似を指摘している。ただし、熊氏は子貢が縱横家の祖であるとの觀點から兩者の類似を説明しており、全面的には從えない。文章の類似はむしろ縱横家の儒家への接近を示すと思われる。

(35) 『史記』平津侯主父列傳。

(36) 『史記』酈生陸賈列傳「沛公至高陽傳舍、使人召酈生。酈生至、入謁…沛公罵曰豎儒…延酈生上坐、謝之、酈生因言六國從横時、沛公喜」。

(37) 『史記』蘇秦列傳「蘇秦喟然歎曰此一人之身、富貴則親戚畏懼之、貧賤則輕易之…於是散千金、以賜宗族朋友」。

(38) 『史記』平津侯主父列傳「臣結髮游學四十餘年、身不得遂、親不以爲子、昆弟不收、賓客棄我、我阨日久矣。且丈夫生不五鼎食、死即五鼎烹耳。吾日暮途遠、故倒行暴施之。…上拜主父爲齊相。至齊、遍召昆弟賓客、散五百金予之、數之曰始吾貧時、昆弟不我衣食、賓客不我内門。今吾相齊、諸君迎我或千里。吾與諸君絕矣、毋復入偃之門」。

(39) 谷中信一二〇〇八、二八五～二八六頁に、『漢書』藝文

志所載の縱横十二家のうち、六家が漢代前半の人物であり、とりわけ武帝期に集中していることが指摘されている。

(40) 『淮南子』要略訓「晩世之時、六國諸侯…各自治其境內、守其分地、握其權柄、擅其政令。下無方伯、上無天子、力征爭權、勝者爲右…故縱橫修短生焉」。

(41) 吉本道雅二〇〇五、第三部第一章（4）馬陵の戰（四八二～四九〇頁）では、前三四九年の晉公室の廢絕後、傳統的な霸者體制が最終的に崩壞し、結果として魏の霸者志向も挫折したことが指摘されている。

(42) 『漢書』藝文志「從橫家者流、蓋出於行人之官。孔子曰。誦詩三百、使於四方、不能專對、雖多亦奚以爲。又曰使乎、使乎。言其當權事制宜、受命而不受辭、此其所長也。及邪人爲之、則上詐譎而棄其信」。

(43) 『戰國策』秦策一・秦惠王謂寒泉子章「秦惠王謂寒泉子曰蘇秦欺寡人、欲以一人之智、反覆東山之君、從以欺秦。趙固負其衆、故先使蘇秦以幣帛約乎諸侯…寡人忿然、含怒日久」。

(44) 趙鵬團二〇一三は文獻に保存された蘇秦の六國合從說話と爲燕閒齊說話の數量を比較し、六國合從說話のほうがより盛行していたと主張する。

(45) 『戰國策』楚策一・張儀爲秦破從連橫章「張儀爲秦破從連橫、說楚王曰…凡天下所信約從親堅者蘇秦、封爲武安君而相燕、卽陰與燕王謀破齊共分其地。乃佯有罪、出走入齊、齊王因受而相之。居二年而覺、齊王大怒、車裂蘇秦於市。夫以一詐僞反覆之蘇秦、而欲經營天下、混一諸侯、其不可成也亦明矣…楚王…乃遣使車百乘、獻雞駭之犀夜光之璧於秦王」。ただし、『讀書雜志』に「乃遣使車百乘、獻雞駭之犀夜光之璧於秦王。念孫案、遣使車百乘、文不成義、當作遣車百乘」とあるに從い、本文では「使」字を譯していない。

(46) 『戰國策』趙策二・張儀爲秦連橫章「張儀爲秦連橫、說趙王曰…凡大王之所信以爲從者、恃蘇秦之計。熒惑諸侯、以是爲非、以非爲是、欲反覆齊國而不能、自令車裂於齊之市。夫天下之不可一亦明矣…趙王…乃以車三百乘入朝澠池、割河閒以事秦」。

(47) 『新語』懷慮に「蘇秦張儀、身尊於位、名顯於世、相六國、事六君、威振山東、橫說諸侯、國異辭、人異意、欲合弱而制彊、持衡而御縱、內無堅計、身無定名、功業不平、中道而廢、身死於凡人之手、爲天下所笑者、乃由辭語不一、而情欲放佚故也」とあり、『新語』が陸賈の手になるものであれば、蘇秦と張儀は遲くとも漢初には關聯附けられていたことになる。しかし福井重雅二〇〇二が指摘するように、現行『新語』は陸賈の眞作とは見做し難い。むしろ、蘇秦張儀を聯稱することこそが『新語』僞作說の一證左となろう。

(48) 『韓非子』五蠹「從者合衆弱以攻一强也。而衡者事一强以攻衆弱也」。

(49) 錢穆一九五六は「余考其時言合從、初不專指拒秦。樂毅傳有之、『燕使樂毅約趙惠文王、別使連楚魏、令趙嚮秦以伐齊之利。諸侯害齊湣王之驕暴、皆爭合從、與燕伐齊。』

是聯秦伐齊亦得謂合從也」と述べ、合從が當初から常に抗秦を指して用いられたわけではないことを主張している。

(50)『史記』樂毅列傳「燕昭王…使樂毅約趙惠文王、別使連楚魏、令趙嚮說秦以伐齊之利、諸侯害齊湣王之驕暴、皆爭合從、與燕伐齊」。ただし、『史記會注考證』に「各本嚮下無說字」とあるのに從い、「說」字を除いて譯した。

(51)『漢書』賈鄒枚路傳「六國乘信陵之籍、明蘇秦之約、厲荊軻之威、幷力一心以備秦」。

(52)賈誼『過秦論』「秦孝公據殽函之固、擁雍州之地、君臣固守而闚周室、有席卷天下、包舉宇內、囊括四海之意、幷吞八荒之心。當是時也、商君佐之、內立法度、務耕織、修守戰之備、外連衡而鬬諸侯」。

(53)『史記』李斯列傳引逐客書に「惠王用張儀之計、伐三川、西幷巴蜀…遂散六國之從、使之西面事秦」とあり、この上書が眞に李斯の手になるのであれば、遅くとも前二三七年以前には張儀と連衡を結びつける言說が存在したことになる。ただし、宮崎一九七七は「逐客書」を比較的信賴できる史料とするが、『文選』注の「通三川是武王、張儀已死、此誤也」や吉本二〇〇〇結語注①の指摘からも知られる通り、「逐客論」の歷史記述には不正確な部分が多く、秦國の人物が書いたものとするには疑念が多い。また、『孟子』滕文公下「景春曰公孫衍張儀豈不誠大丈夫哉、一怒而諸侯懼、安居而天下熄」は孟子在世當時に張儀が既に著名な「縱橫家」であったことの根據としてしばしば引用されるが、『孟子』本文からは張儀と連衡の關聯を讀み取ることは不可能であり、そのような讀みは後世に生じた認識に影響を受けたものであると言えよう。

(54)『淮南子』泰族訓「張儀蘇秦家無常居、身無定君、約從衡之事、爲傾覆之謀、濁亂天下、撓滑諸侯、使百姓不遑啟居、或從或橫、或合衆弱、或輔富强。此異行而歸於醜者也」。

(55)『淮南子』泰族訓「張儀・蘇秦之從衡、皆掇取之權、一切之術也」。

(56)『漢書』武帝紀「建元元年冬十月、詔丞相・御史・列侯・中二千石・二千石・諸侯相舉賢良方正直言極諫之士。丞相綰奏所舉賢良、或治申商韓非蘇秦張儀之言、亂國政、請皆罷」。

(57)『史記』滑稽列傳「武帝時、齊人有東方生名朔、…時會聚宮下博士諸先生與論議、共難之曰蘇秦張儀一當萬乘之主、而都卿相之位、澤及後世…東方生曰…夫張儀蘇秦之時、周室大壞、諸侯不朝、力政爭權…方今以天下之大、士民之衆、竭精馳說、幷進輻湊者、不可勝數。悉力慕義、困於衣食、或失門戶。使張儀蘇秦與僕幷生於今之世、曾不能得掌故。安敢望常侍侍郎乎」。

(58)『淮南子』氾論訓「蘇秦、匹夫徒步之人也。靻蹻羸蓋、經營萬乘之主、服諸諸侯。然不自免於車裂之患」。

(59)『淮南子』詮言訓「蘇秦死於口」、氾論訓「蘇秦知權謀而不知禍福」など。

(60)『史記』蘇秦列傳「蘇秦兄弟三人、皆游說諸侯以顯名。其術長於權變。而蘇秦被反間以死、天下共笑之、諱學其術。

然世言蘇秦多異、異時事有類之者皆附之蘇秦。夫蘇秦起閭閻、連六國從親。此其智有過人者。吾故列其行事、次其時序、毋令獨蒙惡聲焉」。

(61) 『史記』太史公自序「天下患衡秦毋饜而蘇子能存諸侯、約從以抑貪彊。作蘇秦列傳第九」。

(62) 『史記』張儀列傳「夫張儀之行事甚於蘇秦。然世惡蘇秦者、以其先死。而儀振暴其短以扶其說、成其衡道。要之、此兩人眞傾危之士哉」。

(63) 楚世家に「(懷王)十一年、蘇秦約從山東六國共攻秦、楚懷王爲從長」とあり、『史記』編纂者が懷王十一年(前三一八)を起點として十五年遡上した年次を蘇秦の合從開始と見做した可能性は藤田一九九七、四三三頁に指摘がある。『史記』は楚世家編纂段階で「五國攻秦」に蘇秦の「六國合從」を附會しこの懷王十一年(前三一八)から十五年遡上して前三三三年頃を蘇秦の合從成立年に定めたと思われる。これは前三三四年の「蘇秦說燕」の認識とほぼ合致するが、六國燕表が「蘇秦說燕」を前三三三年ではなく前三三四年に繫けるのは、單に君主の卒年に記述するのが煩雜であったからに過ぎない。なお、本來無關係であった蘇秦の「六國合從」が懷王十一年(前三一八)の「五國攻秦」に附會された可能性は吉本二〇〇五、五二八~五三一頁に指摘がある。

(64) 『史記』蘇秦列傳「蘇秦…乃東之趙。趙肅侯令其弟成爲相、號奉陽君。奉陽君弗說之、去游燕」。

(65) 徐少華一九八八は奉陽君に關する專論であるが、奉陽君を李兌とし、趙惠文王四年(前二九五)、或いはやや後に趙相となり、惠文王十三年末或いは十四年に死亡したとする。奉陽君の大凡の活動時期としては從うべきであろう。

(66) 『史記』蘇秦列傳「蘇秦詳爲得罪於燕而亡走齊、齊宣王以爲客卿。齊宣王卒、湣王卽位、說湣王厚葬以明孝、高宮室大苑囿以明得意、欲破敝齊而爲燕」。

(67) 徐中舒一九六四。

(68) 『史記』蘇秦列傳「出游數歲、大困而歸、兄弟嫂妹妻妾竊皆笑之」。

(69) 『戰國策』秦策一・蘇秦始將連橫章「說秦王書十上而說不行…歸至家、妻不下紝、嫂不爲炊、父母不與言」。

(70) 『史記』蘇秦列傳「蘇秦…乃行過雒陽、車騎輜重、諸侯各發使送之甚衆、疑於王者。周顯王聞之、恐懼除道、使人郊勞。蘇秦之昆弟妻嫂側目不敢仰視、俯伏侍取食」。

(71) 『戰國策』秦策一・蘇秦始將連橫章「父母聞之、淸宮除道、張樂設飮、郊迎三十里。妻側目而視、傾耳而聽、嫂蛇行匍伏、四拜自跪而謝」。

(72) 『史記』張儀列傳「蘇秦已說趙王而得相約從親。然恐秦之攻諸侯、敗約後負…言趙王、發金幣車馬、使人微隨張儀…奉以車馬金錢…張儀遂得以見秦惠王、惠王以爲客卿…舍人曰…蘇君憂秦伐趙敗從約、以爲非君莫能得秦柄。故感怒君、使臣陰奉給君資。盡蘇君之計謀…張儀曰…爲吾謝蘇君。蘇君之時、儀何敢言。且蘇君在、儀寧渠能乎」。

(73) 『史記』蘇秦列傳「是時周天子致文武之胙於秦惠王。惠王使犀首攻魏、禽將龍賈、取魏之雕陰、且欲東兵。蘇秦恐

秦兵之至趙也、乃激怒張儀、入之于秦…六國從合而并力焉…其後秦使犀首欺齊魏、與共伐趙、欲敗從約、齊魏伐趙、趙王讓蘇秦…蘇秦去趙而從約皆解」。

(74) 『呂氏春秋』報更「張儀魏氏餘子也、將西遊於秦、過東周。客有語之於昭文君者曰魏氏人張儀、材士也。將西遊於秦、願君之禮貌之也。…張儀行、昭文君送而資之。至於秦、留有閒。惠王說而相之。張儀所德於天下者、無若昭文君」。

參考文獻

《中文》

范祥雍　二〇〇六　『戰國策箋證』、上海古籍出版社。

馬王堆漢墓帛書整理小組編　一九七六　『戰國縱橫家書』、文物出版社。

馬雍　一九七六　「帛書《戰國縱橫家書》各篇的年代和歷史背景」、馬王堆漢墓帛書整理小組編一九七六所收

苗潤蓮　二〇〇六　「論戰國縱橫家的地域分布及成因」『山西大學學報』二〇〇六－三、二〇～二三頁。

錢穆　一九五六　『先秦諸子繫年』、香港大學。

唐蘭　一九七六　「司馬遷所沒有見過的珍貴史料」、馬王堆漢墓帛書整理小組編一九七六所收。

熊憲光　一九九七　「縱橫家之興考辨」、『文獻』一九九七－一、一〇五～一二二頁。

徐少華　一九八八　「奉陽君任相及相關趙史探析」、『河北學刊』、一九九八－四、六七～七二頁。

徐中舒　一九六四　「論《戰國策》的編寫及有關蘇秦諸問題」、『歷史研究』一九六四－一、一三三～一五〇頁。

楊寬　一九五五　『戰國史』、上海人民出版社。

楊寬　一九七六　「馬王堆帛書《戰國縱橫家書》的史料價值」、馬王堆漢墓帛書整理小組編一九七六所收。

楊寬　一九九八　『戰國史』、上海人民出版社。

趙鵬團　二〇一三　「從秦漢學術的層疊現象看蘇秦事迹眞僞的考訂」、『寧夏社會科學』二〇一三－四、一一一～一一四頁。

趙生群　二〇〇七　「《戰國縱橫家書》所載〝蘇秦事迹〟不可信」、『浙江師範大學學報』、二〇〇七－一、六三～六七頁。

諸祖耿　一九八二　『戰國策集注匯考（增補版）』、鳳凰出版社。

《邦文》
大西克也・大櫛敦弘　二〇一五　『戰國縱横家書』、東方書店。
福井重雅　二〇〇二　『陸賈『新語』の研究』、汲古書院。
藤田勝久　一九九七　『史記戰國史料の研究』、東京大學出版會。
宮崎市定　一九七七　「史記李斯列傳を讀む」、『東洋史研究』三五-四、五九三～六二四頁。
谷中信一　二〇〇八　『齊地の思想文化の展開と古代中國の形成』、汲古書院。
吉本道雅　二〇〇〇　「商君變法研究序説」、『史林』八三-四、一～二九頁。
吉本道雅　二〇〇五　『中國先秦史の研究』、京都大學學術出版會。

《歐文》
Maspero, H. 1950. LE ROMAN HISTORIQUE DANS LA LITTÉRATURE CHINOISE DE L'ANTIQUITÉ, Mélanges posthumes sur les religions et l'histoire de la chine, *Annales du Musée Guimet*, Paris, 1950, vol. III Études historiques, pp. 53-62

THE FORMATION OF "THE BIOGRAPHY OF SU QIN" (蘇秦列傳 *SU QIN LIEZHUAN*)

SAITO Ken

Su Qin 蘇秦 is one of the most prominent figures of the Warring States Period. There are, however, glaring contradictions in the biography devoted to him in the *Shiji* (『史記』蘇秦列傳). These contradictions gave rise to controversies around Su Qin from early on. Some scholars went so far as to claim that all the accounts associated with Su Qin were pure fiction.

Analyses of the *Zhanguo zonghengjia shu* 戰國縱橫家書 from the tomb in Mawangdui 馬王堆, which was discovered in 1973, have facilitated the study of Su Qin. On the one hand, it now seems to be generally agreed that Su Qin was engaged in a plot against Qi 齊 in the 280s BCE, there are still some scholars who, on the other hand, argue for the accuracy of the *Shiji*. The problems involving Su Qin are still not completely resolved. In this paper, I will argue that the cause of these problems lies in the lack of understanding of the historical development of the images of Su Qin.

From this perspective, this paper will examine the editorial process of Su Qin's biography by analyzing the *Shiji* and other texts such as the *Zhanguoce* 戰國策.

The story of Su Qin in his biography roughly falls into two parts. The first part narrates Su Qin's success in his official career. In this part, Su Qin persuaded the sovereigns of the six states to ally with one another, thus forming the vertical alliance (*hezong* 合從) which was to counteract Qin 秦. He was conferred a fief as the Lord of Wu'an (*Wu'an jun* 武安君) for this accomplishment. The second part recounts Su Qin's conspiracy against Qi and his assassination. I propose that the latter narrative, in which Su Qin is involved in the fall of Qi, was created at the end of the Warring States Period while the former was invented later in the Han Dynasty. The author of the *Shiji* adopted these two narratives, using them as a framework into which details of Su Qin's biography were inserted.

According to this analysis, it is impossible to claim that Su Qin's biography has a factual basis. However, it is not fair to blame the author of the *Shiji* for having adopted unreliable information about Su Qin. On the contrary, his biography provides substantial and valuable information for scholars to trace the change of Su Qin's images in history.